

『あ、すみだ川の夏』



誰が一番スイカの種を遠くまで飛ばせるかで盛り上がった幼い頃の記憶が頭の中に照らされていた。追い掛けるように、その時に聞いたであろう風鈴の音が蘇る。

縁側で、親戚総出で、笑顔満タンで、陽の光が差していて……拍手の音とか、笑い声とか、空の色とか、土の匂いとか……オレが一番飛ばしたるで！　とか、それは反則やで！　とか……連想が連想を呼び起こして、しまいはみんな食べたスイカの瑞々しさまで思い浮かべてしまって、あの頃の世界に肩までどっぷり浸かり掛けたところで心苦しくなつて引きかえす。

思い出が眩し過ぎたから意識を現実世界に無理やり戻して、部屋を一周ぐると見回していた。床に転がる空き瓶と、ぐしゃぐしゃになった煙草の箱と、一目惚れして買った覆面プロレスラーの人形を捉えてから、原稿用紙にたどり着く。マス目からはみ出さずに行儀よく並ぶ文字たちを見て、なに縮こまって生きてるんだよ、と嘆いていた。

どうしてこの町に来たのだろう

しばらく返答のない文字たちを眺めていると漠然とした想いが渦を巻いていた。何が何でも住みたかった訳でもないし、前の場所が嫌になった訳でもないし、直感に導かれた訳でもないし、自然の成り行きと呼ぶには何だか違うような気もするし……もしかして、

この町に来ない方が良かったのかもしれない

なんて考え始めた時には、

この町に来なければ生みだされなかった物語があるじゃない

と、頭の中の住人が話し掛けてきて、連想を通り越して、『病院を抜け出した少年はなんで抜け出したかった？』とか、『家出した少女は今何を考えている？』とか、物語を描き始める前に、思いつくまま貪るように構想を練っていた数年前の残像が、うつすら瞳の中で輝きを放っていた。

君、あの頃、もの凄くワクワクしていたね

平然と話し掛けてくる頭の中の謎の住人に、ああそうですか、と知らないうちに身に付けた処世術を扱って軽く受け流してやった。すぐにもう一度、ああそうですか、と思いがらも拭い去るように、目を擦ってから煙草を掴んで立ち上がる。

今日も覆面を被っているプロレスラーの人形に向かって、君はいつから素顔を隠すようになったのよ？　なんて心の中で尋ねてから玄関の扉を開いて外に出た。

*

煙草の煙を目で追って、
消えるのを待っている間に、ふと思う。

別に今もワクワクしてるけどな

さきほど話し掛けてきた謎の住人の言葉がしつこく付着しているのを察した時には、ワクワクしてないのかな？　なんていう素朴な疑問が襲ってきたから、今描いている物語がクライマックスに差し掛かっている現状の窮屈さに居心地の悪さを感じているのかもしれない、と、違う角度からの勝手な解釈を押し付けて納得させようとしていた。

いつの間にか姿を消した煙草の煙に未練を抱きながらも、あらためて吸い込んで吐いて新たに誕生した煙をゆると見つめて、はじめまして、と呟いた。

意地でも空まで昇りつめようとする煙が志半ばで消え去るのを最後まで見届けてから、次こそは、と心の中で大袈裟に唱えて吸い殻になるまで新たな煙を生みだしつづけた。

いつもいつもそうだけど、

閃いたときの喜びは爆発的で、
頭の中に現れた壮大なストーリーを、
形にするのは限度を超えた忍耐力が必要不可欠で、
味わった喜びの何百倍も何千倍も葛藤しながら、

何が楽しくて続けているのだろうか？

なんて壁が立ちはだかる瞬間が頻繁に訪れて、

諦めてしまえば楽になれるよ？

なんて悪魔のささやきが耳を通り抜けた時には、

そんなこと言われなくても分かってる、と心の底から賛同しているのに、急に立ち止まることなんて出来なくて猛進している間に破滅の道を歩んでいることに薄々気が付きながらも見て見ぬふりをして、あと少し辛抱すれば道は拓けるはずだ、と最大級の矛盾を抱え込んだまま時が流れるうちに、すべてを投げ出してインド象の背中に跨って過去も未来も考えなくていい砂漠のド真ん中をあてもなく進んでいる風景を思い描きつづけて現実世界からの逃避を図ることに成功してしまっていた。

おかげさまで、色んな町で色んな物語を紡ぐたびに逃げ出す力も肥えてきて、

平均身長が四メートル五センチの世界とか、

明日からハヒフヘホが使えなくなる世界とか、

座っている椅子がいきなりぐねんぐねんに歪み始める世界とか、

見える景色がすべて藍色の世界とか……、

この町に来てからは、のらりくらりと隅田川まで歩いて凝り固まった思考をきっぱりすっきり水に流して、

大気圏で背泳ぎをしたり、

海底に桜の木を植えたり、

犬と猿の熱い抱擁を見届けて涙を流したり、

痛みと優しさがトッピングできるラーメン屋さんを開業してみたり……、

思考の端と端を繋ぎ合わせて解き放つことを覚えてしまった。それでも煮え切らない時には、奥の手を使ってもう一段階深く潜って、今描いている物語の世界の一員としてびよっこり首まで浸かって現実世界と束の間のサヨウナラをすることだって出来てしまう。

すみだ川の夏、

この町に来た次の日には、自然とタイトルが決まっていた。一通りの名前を考え抜いた結果、あえて名づけなかった少年と少女が主人公だ。

太陽が寝静まった真夜中、

今まで一度も出会ったことのない少年と少女の頭の中に、同じ景色が現れた。

見たことも聞いたことも触れたこともない直感的な風景が鮮明に浮かんで、衝動に駆られた二人は引き寄せられるように今ある場所からこそりと抜け出す。

暗闇に包まれながら、

抜け出してしまった不安と、抜け出した勇気を胸に、
パジャマ姿のまま練り歩く。

風景を忘れないように、

何度も何度も思い浮かべて、
喜びと悲しみと癒しと傷みと、
説明できない感情と向かい合ったまま、
誰ともすれ違うことなく突き進む。

初めのうちは、

緊張と興奮で胸が高鳴っていたものの、
行けども行けども、なかなかたどり着かない物哀しさから、
今頃、みんな、心配しているだろう、
なんて戻る理由を探し始めてその気になって引きかえす。

帰り道、

やっぱり怒られちゃうのかなあ、と考え続けながら歩く少年と、家に戻るのを少しでも遅らせようと立ち尽くす少女が、橋の上で巡り合う。

目と目が合って、
数秒経って、

見えない糸で繋がれているかのように、
どちらからともなく歩み寄って、言葉を交わすこともなく、
生まれ持った温かみと、生まれてから身に着けた寂しさを、
素直な眼差しで、分かち合う。

一連の光景を、

橋の下から眺める僕は二人の心情を自分事のように汲み取っていて、ぼくも一緒に混ぜて欲しいなあ、と思った時には、年少少女がこちらに視線を向けていて、不意打ちを食らって驚いて、どう声を掛ければいいか分からなかったから右手をあげて挨拶を交わそうとしたところで、彼らふたりは手を取り合って、未だ見ぬ景色を探し求めて走りだす。

僕は、『生みの親の心情なんて気にも留めずに……』なんて吐き捨てながらも、心地よく、彼らの背中を追いかけた。

この町に住み始めてから何度も通った商店街を、初めて訪れたような気持ちで彷徨うことが出来ていて、ちらりはらりと見え隠れする年少少女が一心同体のようで羨ましかった。

右へ曲がっても、左へ曲がっても、彼らに追いつくことが出来なくて、

左へ曲がっても、右へ曲がっても、商店街から抜け出すことが出来なくなつて、

BGMを奏でる謎の住人が、地べたに座ってクラシックギターを弾いている。

あらゆる場所に顔を出す彼に向かって、どうすればいいですか？ と尋ねようとしたけれど、行き先を知っているのは君だけだよ、なんて頭の中に話し掛けてくるものだから、何も聞かずに年少少女を追いつづけた。

一向に縮まらない距離と、抜け出せない商店街と、変わらないBGMを背景に、もっと速く走らなければならないと思い込み、何振りかまわず腕を振る。

やがて、息を荒げて行くところまで行つたとき、焦る心を逆手にとって、開き直って立ち止まる。

すると場面が、
清澄の庭園に移り変わっていて、

名もなき少年少女の背中がほんの少しだけ近づいて、
飛び石を渡る彼らの背景には、木々が、花が、水が、鳥が、
自然を愛する心情が、視線に宿って心を揺さぶる。

ふたりの背中に向かって、

どうして逃げるの？

名前が欲しかったの？

なんて尋ねようとしたけれど、

BGMを奏でる謎の住人がベンチに座ってふふふと微笑み、

なに野暮なこと聞こうとしてんだよ

なんて面持ちで、

クラシックギターを弾いているのもだから、

ああそうですか

と、面と向かって伝えようとしたところで、

アンタの未来はアンタが決めるんだよ

と、頭の中で声が鳴る。

僕は、

思い切って立ち止まって二人の姿を見失ってから、
大きく深く息を吸って吐き出して、生まれ持ったリズムに返り咲く。

すると場面が、

スカイツリーの目の前に移り変わって、
華麗な花火が、打ち上がる。

僕よりも高いスカイツリーよりも遥かに高く昇る花火を見つめて、
久しぶりに、果てしない空を感じて、

「きれい」

打ち上がって、花が開いて、垂^{しだ}れて、散ってゆく。

ピューー、

ドーン、ドーン、

ピューー、

ドーン、ドーン、

スカイツリーを優に越えて空まで昇りつめようとする花火たちが、何十発も、何百発も打ち上がって、

ピューー、ピューー、

ドーン、ドーン、ドーン、

心静かに見惚れていると、

ことあるごとに現れる幼少期の回想が、花火と共に花ひらく。

ピューー、

縁側で、親戚総出で、笑顔満タンで、陽の光が差していて、

ドーン、ドーン、

拍手の音とか、笑い声とか、空の色とか、土の匂いとか、

ドーン、ドーン、

オレが一番飛ばしたるで！ とか、それは反則やで！ とか、

ドーン、ドーン、

しまいにはみんなで食べたスイカの瑞々しさまで思い浮かべてしまって、あの頃の世界に肩までどっぷり浸かり掛けたところで心苦しくなって引きかえそうと思ったのに、スイ

カの種を遠くまで飛ばせなかった僕を励ます母親の言葉が、耳に残って離れなかった。

「負けるのも、格好ええやんか」

追い掛けるように、

その時に聞いたであろう風鈴の音が蘇る。

当時の僕は、

何が何でも勝ちたくて、

うるさい！ 一番がいい！

なんて、よく泣きわめいていたけれど、

いつしか大人になって、

負けることが恥ずかしいと思ひ込むようになって、

誰かに、もう一人の自分に、負けたと思う度に、

殻に閉じこもって難癖付けて誤魔化して耳を塞いで、

自分の本当の声を届けようともせずに、

知らず知らずのうちに、

素顔を見せることのない日々を、

送るようになっていたのかもしれない……、

「負けるのも、格好ええやんか」

でも今この瞬間になってようやく、

言葉の裏側に隠された真実を受け取る準備が出来たみたいで、

全身が、愛情で、埋め尽くされていた。

ピューー、

ドーン、ドーン、

肩の力が、抜けていく。

ピューー、
ドーン、ドーン。

澄んだ心を抱えながら、
スカイツリーを見あげていると、

ピューー、
ドーン、ドーン、

ピューー、
ドーン、ドーン。

花火の音も大きさも、垂れる長さも到達点も、
打ち上がる場所も色合いも……何ひとつ同じなんてないことに気が付いて、

ふと、

名もなき少女も、
同じ空を見ていればいいなあ、

なんていう想いが湧きあがってきて、
川が流れるように、

今まで出会った大切な人たちの、今まで生みだした登場人物の、
面影が、とめどなく、頭の中を巡り廻って、

みんなも同じ空を見ていればいいなあ、

と、思えた時には、

「みんなに会いたいなあ」と、呟いていた。

覆面プロレスラーの姿をした花火が、夜空にドでかく打ち上がって、
その、華々しい表情を見届けたところで、フィナーレを迎えた。

辺りは静寂に包まれて、

スイカの瑞々しさが消えた頃、

脳裏に、

線香花火をひそかに楽しむ少年少女の姿が映り込んだ時には、
どうすることもできないくらいの心細さに見舞われていて、

誰かが、

服の袖を、

引っ張った。

慌てて振り返った僕を、

待ち望んでいたかのように、

少年少女が立っている。

目と目が合って、

数秒経って、

二人は、どんな景色を探し求めていたのだろうか？

なんて想いが頭の中に浮かんだ時には、

どうしてだろう、

「別になんだっていいよな」

と、柔らかい声を発していた。

ふたりはすべてを見透かしているかのように、

恐れることなく飾り気のない面持ちで迎え入れてくれて、

この、沈黙の時間が妙に穏やかで、永遠に続けばいいのに、とってしまった。

いざ、

彼らの口元が開こうとした瞬間、

エンドロールが流れるように、陽の光を眩しく感じて、車の音が耳に響いた。

つづけざまに、

自転車のベルが、
カラスの鳴き声が、
トラックの排気音が、
人の話し声が、
ありとあらゆる雑音が、

一斉に、

耳の中を通り抜けてから、
信号機の色が、青から赤に移り変わった。

通行人たちは、僕の様子を気に留めることもなく、
その人の、その人生を、黙々と歩んでいるようだった。

時が満ちたかのように、
信号機の色が赤から青に移り変わった頃、

長い間、

橋の上で座り込んでいたことを自覚した僕は、
重力を直に感じながらも、立ち上がって歩き始めた。

足取りが覚束ないのはいつもと変わらないのに、
目に映る景色の、ひとつひとつが、きめ細やかだった。

「窮屈な世界から抜け出させてくれて、
ありがとう」

名もなき少年少女の声が耳に届いて、

「あ、」

思わず、立ち止まっている。

ふたりが探していた風景はこれだったのか、なんて思いながらも、
日常に感動する奇跡的瞬間に遭遇している僕の心は、新しい朝を迎えていた。